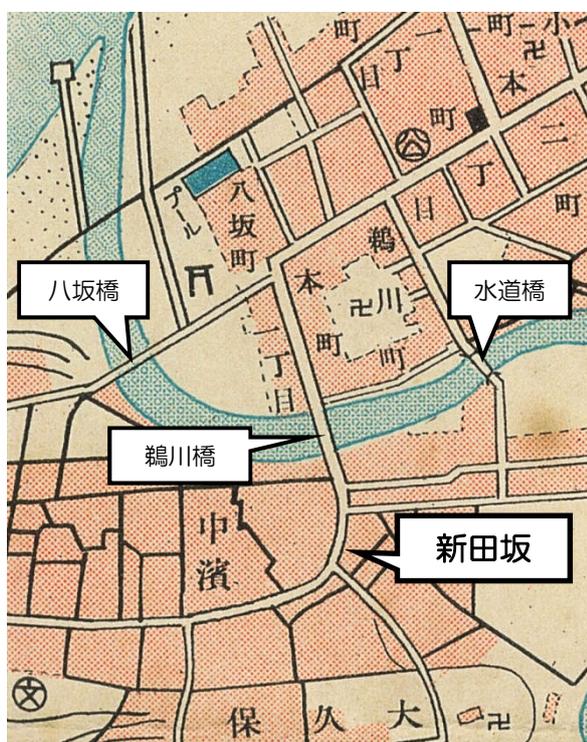


「新田坂」

県道柏崎港線の鵜川橋を過ぎ、番神方面に向かう坂道を新田坂という。坂の名前の由来は、坂ができた時、近くに新田が拓かれたことによる。

新田坂は鵜川橋の架橋に伴って作られた。貞享元年（1684年）、現在の西本町3丁目付近が開拓され、それまで砂畑や砂山だった土地に家屋が建てられると、この地と大洲地区を結ぶために鵜川橋（当時は大橋といった）が架けられた。そのとき、大洲側から鵜川橋への接続のため砂山が切り拓かれ坂道が作られた。これが新田坂である。

坂ができるまで、柏崎から大洲方面に行く人はかつての水道橋付近にあった「こおろぎ橋」を渡り、細い道を通って窪地を経て、勝願寺付近に抜けていたという。坂ができた後は、鵜川橋を通る道が北国街道となり、柏崎と大洲を結ぶ主要道の役割を担った。また柏崎の人々は、鵜川橋を渡り新田坂を上って大久保の陣屋に向かった。



昭和14年の新田坂付近の地図
『柏崎町全図』より

坂さんぽ⑩



新田坂

（大洲側から鵜川橋を見下ろしたところ）

新田坂は、歩いてみると急な坂だとわかる。過去に幾度も行われた改修により緩やかになったというが、昭和の初め頃までは「転げ落ちるような道」だったと伝わる。この急勾配を通らず番神へ行くことができる新しい道が、昭和9年の八坂橋完成とともに開通した。すると多くの人が鵜川橋ではなく八坂橋を通るようになった。昭和29年の柏崎日報に掲載された「鵜川橋二七〇年」では、このことを次のように記している。「今我々は岬町（番神）へゆく時、特別の用がない限り八坂橋を渡るのを当然としている。しかし以前は鵜川橋をわたるのを当然とし、坂があることもまた定まった運命とあきらめて汗を流していたのである。」

●参考にした本

- 『柏崎の民俗と余録』山田良平 著（382 ヤマ）
- 『大洲村誌原稿』関甲子次郎 著（224 セキ）
- 『わたしたちのまち大洲』
「私たちの大洲」編集委員会 編（224 ワタ）